

I-428 パソコン文書ファイルを使った翻訳研究の能率化

岩手大学工学部 正員 宮本 裕・岩崎正二・出戸秀明
函館工業高等専門学校 正員 三浦 登
一関工業高等学校 正員 安彦敏郎

1. まえがき

パソコン(パーソナルコンピュータ)がまだマイコン(マイクロコンピュータ)といわれた頃、いつか大型計算機なみの能力を持つようになるという話は一部の専門家の間でしか理解されなかった。その後8ビットパソコンでソフトの基礎がゆっくり確実に築かれて、16ビットパソコンの発売とともにワープロ、データベース、表計算などの利用の可能性がひろがり、多くのユーザをとらえるようになった。

最近は大学の研究室においてもパソコンの普及がめざましく、学生の教育や研究指導にも広く使われている。参考文献2)によれば、コンピュータのできる仕事として、①文献などの情報収集 ②関連分野の研究者との研究連絡 ③数値計算、シミュレーション、データ解析 ④画像処理 ⑤結果のグラフ化 ⑥論文、報告書の作成 ⑦論文別刷りの発送 ⑧学会や国際会議での発表のためのOHP作成 ⑨様々な事務連絡 ⑩研究成果のデータベース化と公開 ⑪研究室、学科等のスケジュール管理・調整などがあげられる。

ここでは例として、土木技術史の一分野である橋梁技術史の資料作成にパソコンを使って文献を翻訳したることについて述べる。具体的には、参考文献1)を翻訳した際に、日独翻訳の資料として原文(独文)とその和訳を併記した文書ファイルを作ったのである。

2. 文献「橋の文化史」に関する日独文書ファイルの作成

ここでとりあげる「橋の文化史」はミュンヘンにある世界的な科学技術博物館であるドイツ博物館の、橋コーナーの解説と橋の技術史をまとめた本である。この本の特徴としては、橋の技術の歴史だけを述べたものではなく、美学的、社会的、経済史的、政治的観点からもとらえていることである。³⁾

この論文で述べる翻訳のための文書ファイルの作成とその活用については、英語の場合はもちろんフランス語、ロシア語、中国語、朝鮮語等の外国語の翻訳の際にも役に立つものであると信じる。ただしコンピュータであつかうために、入出力のためのメディアの種類とかデータ構造などの条件および対応するソフトウェアなどに制約を受ける。この研究はハードウェアとして日本電気製のPC98、ソフトウェアとしてはジャストシステム社のワープロソフト一太郎を使った。

3. 文献「橋の文化史」における日独文書ファイルの活用

文書ファイルの作り方としては、原文のドイツ語の文章を段落ごとに入力してから、すぐその後に日本語訳を入力していった。このようにして作った日独文書ファイルの活用の方法として、①構文集 ②索引作成 ③訳語の統一 ④辞書の補強 ⑤電子出版、などがある。

以下に具体的に説明する。

①ドイツ語の構文を応用するとき、例文を探すことができる。

つまりドイツ語作文をしたいときに、それに対応する日本語の似たような表現をさがせばよい。

「Deshalb hat man es ein Imperium der Straßen genannt (Abb.42), und die Feststellung ist sicher nicht uübertrieben, daß das großartige Straßennetz das riesige römische Reich entscheidend zusammengehalten hat.¹⁵⁾」

「それゆえ人々はローマ帝国を道路の帝国とよんだ[図42]。大規模な道路網が巨大なローマ帝国をまとめるのに決定的な役割を果たしたといっても決して過言ではないのである。¹⁵⁾」

この場合「ist sicher nicht uübertrieben 決して過言ではない」という構文を利用する場合に便利である。

②ある用語がどこで何度使われていたか数えることができる。

この検索機能は索引を作るときに強力な武器になる。この検索機能を使って、用語の場所と訳語のチェック作業を効率よく正確に行うことができた。

③人間の記憶の不完全を補う。

たとえばある用語を訳すとき、訳をすすめていくうちに理解が深まり、最初に考えていた訳語がより適切なものになっていることがある。この場合訳語の統一をはかるため、全体を訳してからもう一度全体の文章について最善の訳語に直すことができる。

例として、籠手型アーチ(Korbbogen)がある。半径の異なるいくつかの円弧アーチを組み合わせてできるアーチのことである。「多心アーチ」、「多中心アーチ」、「籠アーチ」、「籠手アーチ」とそのつど訳していったが、アーチの形が籠(Korb)の手の形をしているからこの名前をつけたことに気づき、「籠手型アーチ」に統一した。

④自分用の辞書(用語集)の補強

国内にあるドイツ語の辞書は一般に専門用語の記載が少ない。特に比較的新しい用語はなおさら載っていないことが多い。これは英語と比べてドイツ語の辞書は需要も少ない上に、辞書を作る立場の人間の数が絶対的に不足していることも原因であろう。文献を読んだりするときに、このように自分で苦労して作った単語帳を、同じ専門のグループ内でまとめるともっと良い用語集ができる。

⑤引用文献付きの電子出版(CD)も出版社との間で了解がつけば可能である。

このようにしてできた日独文書ファイルは、他の研究者のための資料となる。ただし現実には電子出版を考えた場合、容易にコピーできることから著作権という問題があり、研究者間での情報交換といった意味での活用をしたほうがよいかもしれない。

4. 文書データの特徴について

本研究の日独併記文書データファイルの特徴と今後の問題点を箇条書にすると、以下のようになる。

①日本電気製PC98上のワープロソフトを利用して作った。

②ワープロソフトとして、一太郎でなくても半角のウムラウト文字(Ä Ü Ü ä ö ü)やエスツェット文字(ß)のあつかえるワープロソフトさえあれば、最小限本研究で述べたことはできる。

③ハードウェアの進歩が早いいため、長期の保存・活用に対してはメディアのライフサイクルを考慮して媒体変換をする作業がある(8インチから3.5インチへとフロッピーの主流が変わってきている)。

④OSも変更される可能性があるので、ファイルの互換性を保つことが重要である。

つまり重要なことは過去の遺産資料が将来も使用可能となるよう、ハードとソフト上で連続性をとれることである。

5. あとがき

ここに述べたことは、日独文書ファイルを作りながら翻訳作業の効率をあげた経験談である。このようにしてできた日独文書ファイルは流動的な一種の手作り資料であり、翻訳の不完全さをいつでも後から改良できる。著者らの翻訳に対して成岡昌夫名古屋大学名誉教授から2、3の専門用語について質問があった。成岡先生は土木技術の歴史をまとめていて、参考にしたいとのことであった。そこでこの全文書について検索し効率よく質問に答えることができた。今後も、この文書ファイルの活用を通じて土木工学におけるパソコンの利用の可能性を追求したいと考える。

参考文献

1. Bert Heinrich、宮本・小林訳：『橋の文化史』、鹿島出版会、1991.6.5
2. 佐宗哲郎：理学研究者のためのコンピュータ環境、東北大学大型計算機センター広報 SENAC、Vol.24 No.1
3. ブックレビュー、土木学会誌、1992年3月号、pp.58